

## はじめに

先回のメッセージでは「神の選び」について語らせていただきました。9章の文脈をおさらいしますと、パウロはイエスを拒否する同胞に苦しんでいましたが、「神の言葉は無効になったわけではない。」と神の言葉に集中します。そして、核心となるポイントとして「**イスラエルから出た者がみな、イスラエルではないからです**」という言葉の冒頭に挙げています。これは、イスラエルに生まれた者がすべて真の信仰者ではなかったことを示唆しています。

その例を二つ挙げます。イスラエルの先祖であるアブラハムには八人の子どもがいましたが、全ての子がアブラハム契約を継ぐ者とされたわけではありませんでした。神はあくまでもサラから生まれる子イサクが、アブラハムの子孫であると約束されました。アブラハムの場合は、正妻であるサラから生まれた子が子孫となるわけですから、確かに納得がいく気がします。

では、神は血筋を重んじてイサクが選ばれたのでしょうか。そのような疑問が出ることを想定して、次にパウロはイサクの妻であるリベカによって生まれた双子の例を挙げます。この兄弟は同じ母親から生まれた双子という同じ条件を持っていました。ところが神は彼らが生まれる前に弟ヤコブを選び、「兄が弟に仕える」とリベカに告げられました。このように、神のご計画は、人の行いによるのではなく神の選びによって進められるのです。

### 1. 神に不正があるのか

パウロは明確に、神の選び（予定説）を教えています。人間はそれに対して疑問が湧いてきます。この点では、パウロの時代の人々と現代の人々も変わらないように感じます。

**9:14 それでは、どのように言うべきでしょうか。神に不正があるのでしょうか。決してそんなことはありません。**

神が特定の人を選ぶ一方で、他の人は選ばれないという話を聞くと、それは公平ではないと感じるのは自然な疑問といえます。神は不公平ではないか？という私たちの問いにパウロは決してそんなことはありません。と答えています。

決してそんなことはありません。「メイゲノイト」という言葉は、この手紙で何回か出てきましたが、これはギリシャ語の最も強い否定形であり、絶対的な否定を表しています。ちなみに、口語訳聖書では「断じてそうではない」と訳しています

神には不正がないことを示すために、ラビでもあったパウロは旧約聖書から二つの例を引用して証明します。

## 2. モーセの例

9:15 神はモーセに言われました。「わたしはあわれもうと思う者をあわれみ、いつくしもうと思う者をいつくしむ。」

9:16 ですから、これは人の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。

15節は、出エジプト記 33：19 からの引用です。

出 33:18 モーセは言った。「どうか、あなたの栄光を私に見せてください。」

出 33:19 主は言われた。「わたし自身、わたしのあらゆる良きものをあなたの前に通らせ、【主】の名であなたの前に宣言する。わたしは恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ。」

出 33:20 また言われた。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。」

出 33:21 また【主】は言われた。「見よ、わたしの傍らに一つの場所がある。あなたは岩の上に立て。」

出 33:22 わたしの栄光が通り過ぎるときには、わたしはあなたを岩の裂け目に入れる。わたしが通り過ぎるまで、この手であなたをおおっておく。

出 33:23 わたしが手をのけると、あなたはわたしのうしろを見るが、わたしの顔は決して見られない。」

この箇所の文脈はこうです。ある時、モーセは大胆にも神の栄光を見ることを願いました。ユダヤ人の感覚では、神の栄光を見ることは死を意味しています。しかし、神はモーセにいつくしみを施し、ご自分の栄光を見ること許されました。神はモーセが死なないよ

うに岩の裂け目に入れて隠し、ご自身の手によって彼を守られました。その結果、モーセは通り過ぎた神の栄光の残影（神の後ろ姿）を見ることができました。

この箇所は、「神には自分の御心を行う権利がある」ということを教えています。イスラエルの中から残りの者（レムナント）だけが選ばれたのは、神の主権によることです。それに対して、人間が不平を述べることは許されません。

### 3. ファラオの例

モーセの例は、神がいつくしみを与えられた例ですが、ファラオの例は真逆です。

9:17 聖書はファラオにこう言っています。「このことのために、わたしはあなたを立てておいた。わたしの力をあなたに示すため、そして、わたしの名を全地に知らしめるためである。」

9:18 ですから、神は人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままに頑なにされるのです。

これは、出エジプト記 9:16 からの引用です。

わたしの力をあなたに示すため、そして、わたしの名を全地に知らしめるためである。

とあるように、ファラオの選びには、二つの目的がありました。一つは、神の力を示すためです。ファラオが頑固になったため、十の災害がエジプトに下りました。もう一つは、御名を全地に告げ知らせるためです。

神はファラオを歴史の舞台に召し出して、活躍するようにされました。聖書の視点から言えば、歴史（出エジプト）の中に神の介入があったということです。歴史におけるファラオの役割は、神の民であるイスラエルのエジプト脱出に反対する悪役です。そのような悪役を演じるようにファラオを歴史の舞台に立てたのも神であるということは、神の憐れみと働きの絶対性を表しています。

エジプトの王ファラオが、奴隷であったイスラエルの民の脱出を頑なに反対し妨害したにも関わらず、イスラエルが出エジプトしたことによって、神の力は現実の歴史において現わされました。また、神はファラオの心を頑なにされただけではなく、すべての出来事を支配しておられることを世界中に明らかにされました。

この二つの例からのわかることは、「モーセはあわれみを受け、ファラオはかたくなにされた」ということですが、聖書はファラオの責任を免除しているわけではありません。

「ファラオをかたくなにされた」という言葉は、言い換えれば「神はファラオが頑なになったことを用いられた」となります。ファラオには自由意志が与えられており、彼自身が先ず頑なになったのです。

すべては神の主権によることです。神が歴史を導いておられることを覚え、勇気をいただきましょう。神の許しがなければ、何一つ起こることはありません。

## 最後に

聖書は、世の始まる前から神のご計画が確かである事実と、人間は神の前に自由意志が与えられた責任のある存在であるという事実の両面を教えています。

聖書は神が創造主であり、全宇宙を支配し、人間の歴史を導いていると述べています。聖書には神の摂理や目的が示されており、神の計画が時間や出来事を超えて確定していることが伝えられています。一方で、聖書には人間が神の前に自由意志を持っており、責任を持って行動する存在であるとも教えています。パウロは9章14節で「**神に不正があるのでしょうか、決してそんなことはありません**」と言って気ままな推論にブレーキを掛けました。

神は、ご計画を摂理によってゴールに向けて歴史の中に展開していかれ、人間はその歴史の中で神の前に責任ある存在として生かされているというのが聖書の教えているところです。これは私たち人間の限りある論理では説明しきれなくても、聖書に啓示されているところをそのまま受け入れるしかありません

「神の選び」（予定説）のような難解な教理に向かう際に必要な態度は、謙遜です。聖書がこう示している通りです。

イザヤ 55:8-9 「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、あなたがたの道は、わたしの道と異なるからだ。——【主】のことば——天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。